

(様式1)

大学院派遣研修報告書

所属校	三鷹市立第一小学校	氏名	小暮 敦子
派遣大学院	東京学芸大学	専攻・コース	学校心理専攻・学校心理コース
研究テーマ	プレゼンテーション指導における評価項目の検討		

I 研究の概要

1. 背景

社会の情報化にともない、情報通信ネットワークが急速に進展した。情報量の増加は、コミュニケーションに変化をもたらし、必要な情報を整理して相手にうまく伝える能力がこれまで以上に求められてきている。中でもプレゼンテーション（以下、プレゼン）能力は、情報化社会を生きる上で必要な表現力として注目を集めている。プレゼン能力育成のためには、小中学校から系統的な指導が行われることが必要である。高等学校ではプレゼンを教科「情報」の中できちんと位置付けられている一方、小学校では各教科や総合的な学習の時間の中に入れ込む形で指導されている。しかし、教科のねらいや学習場面との明確な対応がされておらず、プレゼン指導の内容や方法は、明らかではない。スライドを作ることがプレゼンであるかのようなスキル偏重の指導に陥りやすい原因もここにあると思われる。このような現状から、小学生には、どのようなプレゼンが求められるべきなのか、何を重点に指導すべきなのかを明らかにすることが急務であると考え、次の3点を本研究の目的とした。

2. 目的

プレゼン評価項目について3つの検討を行い、小学校で指導すべき内容を明らかにする。

検討1：児童が重視するプレゼンの評価観点・評価項目は何か

検討2：評価項目間にどのような相関関係があるか

検討3：プレゼンの評価に影響を及ぼす要因は何か

3. 方法

図1のような流れで調査を行った。調査対象者は、小学生と大学生である。本研究は、小学生と大学生の結果を比較することが目的ではなく、あくまでも小学校のプレゼン指導への示唆を得ることを目的としている。そのため、大学生の結果は、小学生の結果解釈の手がかりのひとつとして位置付け、調査を計画した。

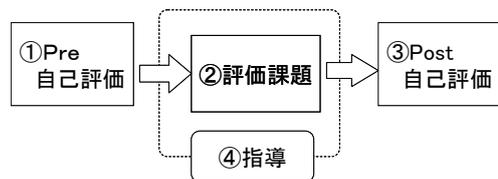


図1 調査の流れ

調査対象者：都内M小学校5年1組30名

調査期間：平成17年4月～7月

指導内容：社会科・総合的な学習の時間「都道府県調べ」

※日本の水産業、農業の学習の過程で一人一県を担当し、調べたことをプレゼンの形で全員が発表する。社会科は27時間、プレゼン作成と発表は12時間程度指導した。

①pre 自己評価・③post 自己評価

指導前後の自身について評価する。質問紙の内容と項目数は次に示す。

1) パワーポイントの技能について(12項目)(辻ら, 2003)

2) スライドの見やすさについて(12項目)(堀田, 2004)

3) プレゼンで重視する評価観点と評価項目について(21項目)(坂元, 2004)

② 評価課題

授業の中で友達のプレゼンを聞いて評価する。内容と項目数は次に示す。

- 1) プレゼン7観点とスライドの見やすさの評価(10項目) (坂元, 2004)
- 2) スライド構成についての評価(5項目) (堀田, 2004)
- 3) プレゼンス(話し方)に関する評価(8項目) (堀田, 2004)

※以上の質問紙は、先行研究の一部を引用、または参考にして筆者が作成した。

4. 結果と考察

4.1 児童が重視する評価観点・評価項目は何か

プレゼンの評価観点は7つ、各観点の下に3つずつ評価項目を設定した(表1)。評価観点と項目を「非常に大事」「かなり大事」「やや大事」「大事」「少し大事」と重視する度合いに応じて5段階に分類して回答を得た。それぞれを5~1点に得点化して重視する評価観点や評価項目を明らかにした。

図2は、重視する評価観点の変化について示したものである。縦軸は得点の高さ、横軸は指導前と後を示す。得点が高いほど重視する観点である。

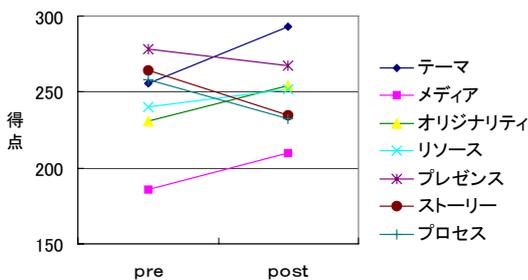


図2 重視する評価観点の得点の変化

児童が重視した評価観点は「テーマ」、「プレゼンス」だった。特に「テーマ」は指導後に重要性が有意に高まった。

($t(80)=2.46, p<.05$)

大学生も小学生同様、「テーマ」「プレゼンス」が重視する評価観点であった。

図3は、21個の評価項目の prepost の得点と変化の関係を表したものである。図3は、図4に示す4つの領域から成る。A~Dの領域はそれぞれ次のような特徴をもっている。

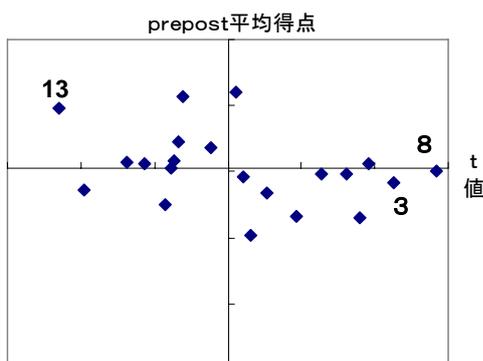


図3 評価項目の得点と変化の関係

表1 評価観点・評価項目一覧

評価観点	NO	評価項目
テーマ	1	一番伝えたいことがはっきりしている
	2	よいテーマをえらぶ
	3	プレゼンを聞いてもらう目的がある
メディア	4	コンピュータやデジカメのよさを考えて使う
	5	いろいろな機器や道具を使う
	6	見やすくするために機器を使う
オリジナリティ	7	友だちがやらないような方法で調べてる
	8	いろいろな考えと比べながら自分の考えを言う
	9	プレゼンテーションに自分らしさが出ている
リソース	10	たくさんの資料を用意する
	11	集めた資料の中で必要だと思うものを選んで使う
	12	何種類かの資料を集めて調べる
プレゼンス	13	聞いている人を意識して、アイコンタクトをとって話す
	14	明るく、楽しく、身振りなどを入れて話す
	15	自信をもって相手の心に強くひびく話し方をする
ストーリー	16	一番伝えたいことをどこで言うかを考える
	17	スライドにタイトルや題を入れる
	18	話の流れがスムーズである
プロセス	19	下書きをして、スライドを作る前に計画を立てる
	20	リハーサルをして間違っていたところを直しておく
	21	本番前にだれかに聞いてもらう

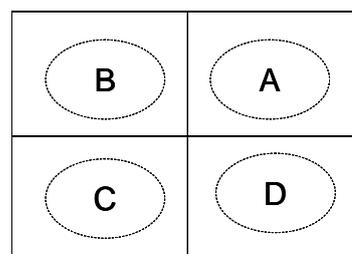


図4 関係の図の4領域

- A領域→得点が高く、指導後に高まった項目
- B領域→得点が高く、指導後に高まることのない項目
- C領域→得点が低く、指導後に高まることのない項目
- D領域→得点が低く、指導後に高まった項目

21項目は、A領域に2項目(1,2,)、B領域に8項目(9,11,13,15,16,17,20,21,)、C領域に2項目(9,19,)、D領域に9項目(3,4,5,6,7,8,10,12,14,)という分布結果だった。t検定の結果、有意差があった項目は、「13. 聞いている人を意識してアイコンタクトをとって話す」「8.いろいろな考えと比べて意見を言う」「3.プレゼンを聞いてもらう目的がある」だった。

さらに、児童が重視する評価項目について右の表2のように分類して考察する。

①重視上位群

- 1 : 伝えたいことがはっきりしている
- 11 : 集めた資料の中から必要なものを選ぶ
- 16 : 一番伝えたいことをどこで言うか考える
- 20 : リハーサルをして間違っていたところを直す

②重視下位群

- 4 : コンピュータやデジカメのよさを考えて使う
- 5 : いろいろな機器や道具を使う
- 10 : たくさんの資料を使う
- 18 : 話の流れがスムーズである
- 19 : 下書きをしてスライドを作る前に計画を立てる

表2 小学生の重視項目と変化の大きさ

	変化大 (有意差あり)	変化小 (有意差なし)
重視上位群	*13>	1, 11, 20, 16, 2, 9, 15, 17, 21,
重視下位群	*3<、*8<、	4, 10, 5, 18, 19, 6, 7, 12, 14,

注)重視上位群・重視下位群…全体平均3.05で項目を分けた
注)*→有意差のあった項目 <→pre<post, >→pre>post
注)斜体字の項目は、上位、下位から5つ目までの項目

児童が重視した項目の要素は、「主張」「結論」「資料の厳選」「リハーサル」の4要素にまとめられる。この4要素は、児童が十分に認識できることから、これらがプレゼンの重点指導項目であるといえる。逆に重視しなかった項目は「使用機器」「多量の資料」「スムーズな流れ」「下書き」の4要素にまとめられる。児童の実態に合った指導を考えるならば、これらは、あまり優先されない指導内容であると解釈できる。

4.2 評価項目間にどのような相関関係があるか

21の評価項目がどのような構造をしているのかを明らかにするため、因子分析を行った。抽出した因子を図5のように解釈し、評価構造が明らかにした。指導前(pre)は4因子だったのが指導後(post)には5因子に増え、因子が細分化したことが分かる。

また、指導後に新たに「聞き手意識」という評価の枠組みができた。これは、指導の過程で評価課題を使って継続的に友だちのプレゼンの評価を行ったことによる効果であるといえる。

以上のことから児童は、21の評価項目を「主張の端的さ」「聞き手意識」「結論の位置」「素材の吟味」「準備」という5つの枠組みでとらえていたと解釈できる。このような評価構造は、小学生特有の結果なのだろうか。大学生の因子分析の結果(表3)と比較して考察する。

表3 命名された因子名(大学生)

因子	Pre	Post
1	混沌	主張の端的さ
2	調査	聞き手意識
3	主張の端的さ	調査
4		結論の位置

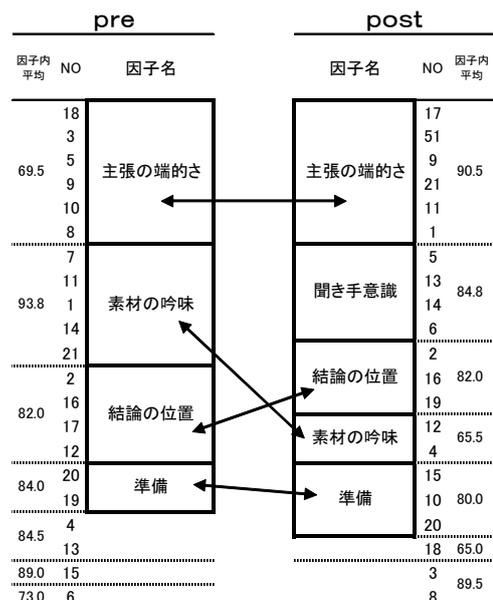


図5 因子分析の結果

大学生も指導前より指導後に因子数が増えたこと、「聞き手意識」因子が新しく抽出されたことが共通していた。小学生も大学生も指導の前は、評価項目の違いを意識することができないまま評価を行っていたが、指導後には同様の評価構造になることが明らかになった。以上のことから、プレゼンの評価項目は、「主張の端的さ」「聞き手意識」「結論の位置」という主要な評価の枠組みから構成されていると言える。

4.3 プレゼンの評価に影響を及ぼす要因は何か

プレゼンの評価は、発表者、評価者、項目のどの要因に最も影響を受けるのかを明らかにした（一般可能性理論により要因を検討）。クラス全員の発表を4回に分けて行い、毎回、所定の用紙を使ってプレゼン評価を行った（②評価課題）。3要因のうち、分散推定値割合が大きいものほどプレゼン評価に影響を及ぼす要因と解釈することができる。図6は、第1～4回の3要因の割合の変化を示したものである。

4回の発表のうち3回が「項目」要因の割合が最も大きかった。つまり児童は、項目に忠実にプレゼンの評価を行っていたということが出来る。また、評価課題で使用した評価項目の識別性が高かったことを示している。この結果から、この評価項目で児童にプレゼン評価をさせる場合には、各項目が示すプレゼンの達成状態（基準）を児童に具体的に示す必要がある。

一方、大学生は、6回の発表で「評価者」要因が最も大きい結果となった（図7）。これは評価者の分散が最も大きかったということであり、評価する人により、プレゼンの評価が全く違っており、評価の傾向が大きく分かれてしまっていることを示す。以上のことから、小学生と大学生では、プレゼン評価に影響を与える要因が大きく違っていた。

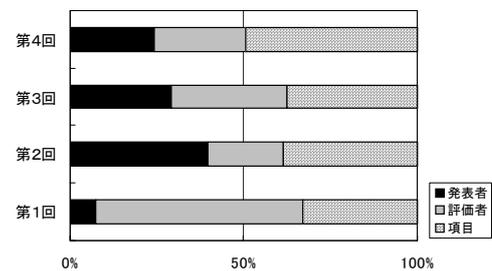


図6 小学生の分散推定値割合の変化

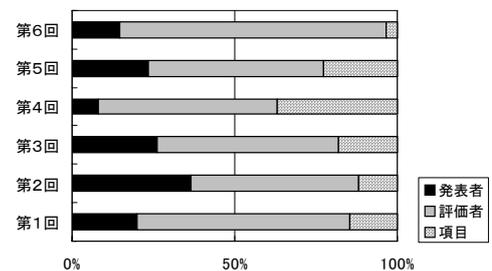


図7 大学生の分散推定値割合の変化

II 学校等における研修成果の活用計画

- ・プレゼンの評価項目について定量的な検討を行ったことにより、小学生へのプレゼン指導の重点内容が明らかになった。今後は、プレゼン指導の主要内容をより具体的に示すことが必要である。教科等の学習のどの場面で、どの学年で、どのような指導を行うことが有効であるかを実践的に検証する。具体的には、高学年の情報教育の“情報の表現”と国語科の「伝え合う力」の育成との関連が深いと思われるので、まずは、この分野での実践が考えられる。研究で得た知見を学習指導案の中で具現化することで研修成果を活用していく。
- ・本研究で使用した質問紙や教材を今後も活用して、継続調査を実施して参りたい。本テーマの研究を通して、小学生用のプレゼン指導の手引きを作成することをめざしている。今後、研究授業や学会等などの発表の場を利用し、研究経過を報告することで指導をおおぎ、自身の研さんに努めていく。大学院研修で得た研究の手法と現場の実践研究の手法の両方を活用した実践的研究を通して自身の指導力向上に努めて参りたい。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	三鷹市立大沢台小学校	氏 名	小暮 敦子
派遣大学院	東京学芸大学	専攻・コース	学校心理専攻・学校心理コース
研究主題	プレゼンテーション指導における評価項目の検討		
1 所属校での成果活用	<p>本研修を経ての成果活用は、次の2点ととらえている。</p> <p>1. 所属校での質的な実践研究を定量的に検討することができた</p> <p>前所属校では、プレゼンテーションを積極的に授業に取り入れ、どのような学習効果が期待できるかを検証してきた。2年間の授業実践から、プレゼンテーションを指導する際のポイントや留意点を低・中・高学年ごとにまとめた「プレゼン指導マニュアル」を作成することができた。これは、実践研究の産物であり、現場の知見としての価値は大きいですが、もう一步深く考察したいと思った。</p> <p>大学院では、児童がプレゼンテーションを行う学習過程を分析的に観察し、定量的にデータを収集し、統計的な処理を施した上で学習効果を検証することができた。これまでの研究成果を別の視点で考察できたことや、専門的な研究手法を習得できたことの意味はとても大きい。</p> <p>2. プレゼンテーション指導の重点を明らかにすることができた</p> <p>プレゼンテーションは、様々な形態で行われるものである。そこで本研究は、プレゼンテーションを「コンピュータで作成したスライドによるプレゼンテーション」という枠組みでとらえて研究を行い、3つの検討を行った。その結果、小学生の実態に合う指導目標や指導重点を明らかにすることができた。</p> <p>プレゼンテーションの重点指導項目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主張・・・伝えたいことをはっきりさせる。 ・資料の厳選・・・集めた資料の中で必要なものを選ぶ ・結論・・・一番伝えたいことをどこで言うかを考える ・リハーサル・・・互いに練習を見合い、修正する <p>これは、今まで一般的に使われてきたプレゼンテーションの評価項目を整理する結果につながった。「小学生にどうプレゼンテーションを教えたらよいか」という課題に対するいくつかの答えを出すことができたと自負している。どの学校でも、どの学級でも指導可能な内容にしていく必要があると思っている。</p>		
2 委員会・研修会での成果活用	<p>※今年度11月の時点で、都や区市町村教育委員会等における各種委員会や研修会における発表、及び公開授業は特に行っていません。</p>		

<p>3 成果を生かした研究授業等</p>	<p>○授業実践Ⅰ「これからよろしくね」 日時：平成18年4月 教科：国語・総合（5時間扱い） 内容：学級編成替えのあった5年生。自己紹介をプレゼンテーションで行った。これまでプレゼンテーションソフトを使った経験がなかったため、基本的なスキルについて指導した。初期指導のため、スライドの枚数を5枚までとし、必ず写真や画像を入れることや「はじめ・中・終わり」の展開で発表原稿を作ることなどを条件に入れた。 成果：プレゼンテーション指導の重点のうち、今回は「主張」（何を一番伝えたいか）と「資料厳選」（効果的な資料は何か）ということにしばって指導した。自分をアピールするという国語の学習にもつながりをもたせた。短時間で自分のことを印象づけるためには、視覚に訴える工夫が必要なことやはじめにインパクトを与える論理構成にすることなどを学習させた。</p> <p>○授業実践Ⅱ「夏休み自由研究発表会」 日時：平成18年9月 教科：総合的な学習の時間（3時間） 内容：夏休みに取り組んだ自由研究をプレゼンテーションの形で発表する。これまでの発表では、紙に書いたものは聞いている人にはよく見えないこと、実物を見せる際もどこを見てほしいのかわからないことなど、これまでの発表のしかたの問題点を洗い出した。それらを解消しながらプレゼンテーションできないかを考えさせた。 成果：指導の重点のうち、今回は「資料の厳選」（どのように見せたらよく分かるか）、「リハーサル」を重点に授業を構成した。子どもたちの作品は教室に展示されているため、プレゼンテーションでどのような情報を盛り込むことに効果があるのかを考えさせた。今回は、下書きの段階で教師がチェックを入れ、スライドを修正する時間を意図的に設けた。前のスライドをどう修正したかが後でわかるように記録させておいた。その結果、デジタルカメラで作品の一部を大きく写す、教材提示装置を使って映しながら説明する、スクリーンの前で実演する、などの工夫が生み出された。プレゼンテーション能力育成には、一度に多くの内容を盛り込むのではなく、指導の重点化を図ることが必要であることを改めて感じた。</p>
<p>4 今後の活用計画等</p>	<p>今年度は、異動にともない現所属校での成果活用は十分とはいえない。所属校の経営方針、及びこれまでの研究実績を踏まえ、自分自身の果たすべき役割をしっかりと考えていきたい。今後、具体的に取り組むこととして次の2つを考えている。</p> <p>1つ目は、明らかにしたプレゼンテーション指導の重点具現化のため、本校の指導計画づくりを行う。これまでの指導計画を生かしながら、情報教育部の中でさらによいものを作成して参りたい。特に、国語や社会などの教科学習の内容と関連づけていくことも重要であると考えている。</p> <p>2つ目は、授業を積極的に公開して多くの方から指導を仰ぎ、引き続き研究成果の検証を行うことである。小学校においてプレゼンテーションに関する実践は決して多いとは言えない。そこで、自身の取り組みを校内のみならず、市内での研修会等で紹介することが2年間の研究成果を活用することにつながると考える。そのためには、様々な研究機関とかかわり、自身の実践を発表できる機会が得られるよう努力していく所存である。</p>